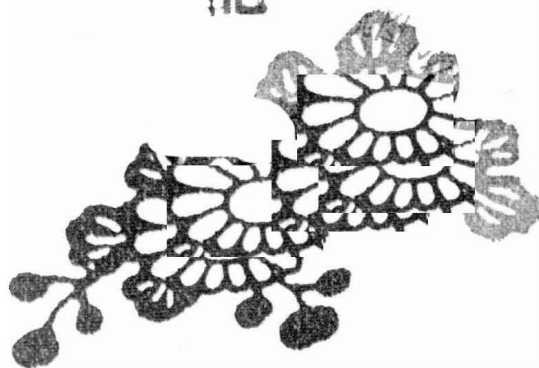


ひめゆりの塔を めぐる人々の手記

仲宗根政善



ひめゆりの塔を
めぐる人々の手記



仲宗根政善

ひめゆりの塔をめぐる

人々の手記



仲宗根政善

昭和五十五年六月十日 初版発行
昭和五十五年七月十五日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三(二六五)七一―一大代表
〈振〉東京三一―九五二〇八(郵)一〇二

旭印刷・宮田製本

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0095-883093-0946(0)

まえがき

第二次世界大戦で沖繩ほど戦禍をこうむった島は世界になかった。二十余万の生霊の血をもって山河を染め、沖繩は「血の島」として世界に知られた。この「血の島」でも、とくに悲惨をきわめたのはひめゆり学徒隊の最期であった。わずか十六歳から二十歳までのうら若い乙女らが、あれほどに激しかった戦争に参加して、かくも多数戦死した例は人類の歴史にかつてなかった。

乙女らはもとより戦を好んで戦死したのではなかった。いたずける勇士をいたわり女性のもつ優しい天性のゆえにたおれたのであった。

この悲劇が戦後、あるいは詩歌に生まれ、あるいは小説につづられ、演劇、舞踊になって人々の涙をそそっている。ところがこの事實は、しだいに誤り伝えられ伝説化しようとしている。乙女らは沖繩最南端の喜屋武の断崖に追いつめられて、死の孤独感におそわれ、岩肌にピンで自分の最期を記していた。

ふたたびあらしめてはならない最期の記録であった。乙女らが書き残そうとした厳肅な事實を私は誤りなく伝えなければならぬ義務を負わされている。洞窟に残した重傷の生徒たちのことを思うと、この記録は私にとっては懺悔録でもある。戦場に印した乙女らの血の足跡をありのままに記すことは、亡き乙女らへの供養にもなるうかと、灯油もなかった終戦直後、ピンにはいったマラリ

ヤ蚊の防止薬をともして書きためた。私は乙女らの胸に飾られた赤十字のマークが永遠に輝くことを信じている。世界の人々が国境を越えて、この乙女らに花を手向ける日が来ることを信じている。

この記録は文学でもなく、生き残った生徒の手記を集めて編纂した実録であり、氏名も日時も場所も正確を期した。肉親のかたがたには、娘や妹の面影をしのんでいただけたら幸いである。

原子爆弾の威力をもっと深く考えるのでなければ永遠の平和は望めない。こうした厳粛な事実をもっと深く考えるのであれば永遠の平和は望めない。

乙女らは、「汗と涙と血を流して得た貴重な体験を、この土に埋めたくない」と叫びながらついに、永遠に黙してしまった。しかし永遠に訴えつづけるであろう。

本土に復帰しても沖縄基地は日本全体の五十三パーセントを占め、その機能はますます強化されつつある。駐留する米第三海兵師団はインド洋・ペルシャ湾での有事に即応する緊急展開部隊として出撃態勢をとっている。国際情勢の変化にもなつて、基地の重圧はますます県民にのしかかつてきつつある。

昔から平和であつた沖縄のこの美しい空を、この青い海の上を、戦闘機の一機も飛ばせたくない。戦争につながる一切のものを拒否する。

二十余万の生霊の血のしみたこの島を、平和を築く原点としたい。

三十三年忌に想思樹会員たちが集めた学友の写真をあらたに加えて記事を増補した。

角川歴彦氏のご好意によって復刊出来たことを心から感謝申し上げる。

昭和五十五年三月

著 者

目次

まえがき——一

陸軍病院の日々

- 一 艦砲射撃はじまる——七
- 二 陸軍病院——一六
- 三 卒業式——二三
- 四 黄泉の壕——二四
- 五 看護志願——二九
- 六 白ゆり——三〇
- 七 勝利の日——三三
- 八 小杉さん——三五
- 九 最初の犠牲——三九
- 一〇 生き埋め——四一

一一 第一外科——一六

一二 第二外科——一六

一三 生き地獄の兵器廠——一七

戦火に追われて

一四 病院移動——一七

一五 担架の上の学友——一〇三

一六 糸洲——一五

一七 渡嘉敷良子——一六

一八 病院勤務者の配置——一〇四

一九 石室の軍医——一七

二〇 糸数用武——一六

二一 真空の緑野——一〇二

二二 小ヤギの死——一〇四

二三 波平最後の日——一五

二四 影二つ——一六

二五 壕脱出——一七

二六 目大尉、平川見習士官の自決——一七

死の解散命令

二七 死の解散——一八五

二八 奇遇——三二

二九 いやはての断崖の歌声——三三

三〇 自決——三六

三一 自決した師友にはぐれた三人——三九

三二 死線をさまよう——三七

三三 学友の死と小鳥——三五

三四 国頭突破——三六

三五 ひめゆりの塔の壕——三九

三六 屍とともに——三八

浄魂を抱いて

三七 ひめゆりの塔——三四

三八 浄魂を抱いて——三九

あとがき——三二

ひめゆりの塔の記・ひめゆりの塔に祀られた戦死者——三五

陸軍病院の日々

一 艦砲射撃はじまる

一九四五年三月二十四日

ほのぼのとあけそめる空に、もう魔鳥のような機影があらわれ、今日も昨日にひきつづき空襲だった。学校までもゆけず、城岳食糧営団の壕（那覇高校正門前）の入口から空を眺めていると、昨日は慶良間へと飛んで那覇の上空を素通りした飛行機が、今日とはときどき旋回しては天久、垣花の高射砲陣地に投弾していた。島尻の方から、聞きなれぬ轟音が大地をゆさぶってとどろきはじめた。十時ごろだった。那覇署の警官が壕に息せききってかけこみ、

「艦砲だ！ 港川に艦砲がはじまった」

と告げた。いよいよ上陸だ。来るべきものが来た。私はじっとしておれず、壕を飛びだし、飛行機の飛びかう中を学校へと急いだ。

風が強くはこりがたちこめ、空はうすもやのような雲におおわれていた。開南中学から壺屋間の道路は、遮蔽物一つなく、突破が困難なので、与儀試験所農場の想思樹のかけをつたい、鉄道線路

に出て、壺屋部落の石垣にそって、ひめゆり橋を渡って学校へたどり着いた。

鉄道線路下の暗渠、西の壕といっていたが、そこには西岡部長、仲栄間助八教諭以下一高女の寄宿生がいた。

「いよいよ港川に艦砲がはじまった」

と告げると、全員ひきつったような重苦しい面持ちでお互いを見あわせていた。その足ですぐ東射的場の壕に連絡にいった。寄宿舎南側の民家が、二百キロの直撃弾をくらい、木々葉微塵に破壊され、寄宿舎の石垣には生々しい弾痕が白く、芙蓉の枝が折れてたれさがり、道路には土塊が飛び散っていた。東の壕に飛びこむと、算を乱してにげたあとで、フロシキや救急袋がちらかっていた。付近の民間壕にたち寄ってたずねると、生徒は識名の坂を登っていたという。溝にかくれ、草むらにふし、木かげを伝わって飛行機をさけながらゆくえをたずねた。西平、岸本両教官に引率されて識名高射砲陣地に待避していることがようやくわかった。この陣地は生徒が勤労作業で、八月以来半年も軍に協力して構築したもので、高射砲隊もこの壕はあなたがたのものでもあるといつて好意を示してくれた。兵隊は汗をふきふき壕の整備にたち働いていた。心と心とがかたく握手し、兵隊にいいしれぬ親しさを感じ、その姿がおがみたいほどに尊く感じられた。一刻も時間をむだにしてはならぬと、生徒も兵隊に協力して一日中壕の整備にたち働いた。

私は監視哨のところで、しばらく空襲の状況を眺めていた。つぶてのように遠く飛んでいる飛行機が、たちまち頭上に大きな姿をあらわし、突如、急降下で襲いかかり、すぐ目の前の津嘉山に柱のような焰をはき、爆弾を投下して去った。天久、垣花の高射砲隊はすでに沈黙していた。今晚中

に読谷よみたんの高射砲隊もひきあげるような話であった。予定の行動だとはいつていたが、すでに沖繩戦は勝ちみのない戦だと直感した。卒業生の神谷シズさんが、昨日からの空襲をくぐって、遠く国頭くにがらから妹のノブ子さんをたずねて来ていた。防衛隊（住民を召集して編成した隊）に召集され百里飛行場作業に従事している父と夫に最後の別れを告げに来たのであった。

空襲は晩までつづいた。生徒は昼食も食べていなかったの、隊長がわざわざ百幾名の夕飯を用意してくれた。梶屋軍曹かじやはとくに、親切に生徒のせわをみてくれた。隊長は私たち職員を呼んで、こう注意された。

「実は、ただいま軍では食糧の食いのばしをしている。夕食を炊いてやったことは、ないしょにしてもらいたい」

と。隊長の好意があったかった。

日もとつぷり暮れてしまい、空襲もやんだ。仲宗根芳雄訓導なかそね くんどう（玉木芳雄）と二人は一足先に識名の壕を出た。部落の人々も壕から家に帰って炊事をはじめていた。あかあかと夕日の沈んでいる慶良間島は美しい微光につつまれて静かだった。さっそく付属にいった。主事室には二十三日卒業式に渡すべき卒業証書が黒い盆にのせられて、時計ばかりがカチカチと動いていた。壁には戦局の推移を示した太平洋の地図がはられていた。糸教訓導いとが くんどうが、すでに陥落したサイパンを指でさし、手をふるわせながら、

「もうすぐですよ。いまに来ますよ」

と沖繩島にサイパンから線をひいていたのは二週間前だったが、早くも現実となったのだった。

静かに廊下をつたい、玄関を出ようとすると、小屋につながれたままヤギがゆうげをねだってしきりに鳴いていた。解き放つてやる余裕もなく門を出た。堀にそつて部長住宅に急いでゆくと、うしろから呼びとめる者がいた。玉栄清良訓導であつた。

「家族をつれていますので、学校と行動をとものにすることができませんからよろしく」

と、さもすまなさそうにしていた。もとより彼は付屬訓導だから、女子部の生徒を引率する直接の責任はなかつたが、責任感の強い彼の心根がうれしかつた。彼は他県へ疎開させるため、家族を郷里の勝連半島から那覇へつれて来ていたが、船に積んだ荷物いっさいを空襲で焼いて、とうとう無一物になつて戦争にぶつかつたのであつた。部長住宅はひっそりしていた。

一高女生は西の壕からひきあげ、各自の部屋に帰つて準備を整えているらしく、ときどき生徒の聲が寄宿舎から聞こえた。一昨晚、卒業生を送るためステージの飾りつけをしてあつた食堂は、空襲警報がかかったので、そのまま暗くとざされていた。庭園の榕樹のこずえは、ゆらぎもせず西空のあかりがほのかに漂っていた。西岡部長は、

「私は今日から、軍司令部にゆくことになった。野田校長は男子部にゆかれる。いよいよ御奉公のときが来た」

といつもとちがいしんみりしておられた。

今晚いよいよ南風原陸軍病院へ出発することになったので、城岳の家に荷物をとりに帰つた。たびたびの空襲で城岳一帯は全焼し、その中に奇蹟的に焼け残つたわが家がしょんぼり建つていた。いそいで玄関にはいると、いとこの仲里源盛君が壕から帰つて待つていた。隣の上間の親子も荷

造りをしていた。必要な品だけをリュックサックにつめ、たいせつにしていた図書は机の上にきちんと整頓して、研究の料をあつめた方言手帳だけをリュックサックにつめこんだ。ふと気がつくときポケット用の英和辞典が一冊あった。何かしらこの辞書に魔がさしているようで、幾度か持ったところかゆくまいかと手にとったりおいたりした。胸の中には、「十十空襲」（昭和十九年十月十日那覇を中心とした大空襲）以来のさまざまな思い出が入り乱れていたが、べつに感情の高ぶったあいさつもかわさず、ありふれたことをいいあって仲里君と別れた。

上間の親子も門前に出て送ってくだった。これが一生の別れとなるかもしれないと思って丁寧に別辞をのべて去った。庭の芭蕉の葉が月影にゆれて、別離にこたえているかのように見えた。

部長住宅の門に来ると、鉄道線路の土手にもたれて生徒が二、三名小声で校歌を歌っていた。しばらくして全員、部長住宅庭園に集合。部長は縁側に立ち、最後の訓辞をのべられた。

「いよいよ米軍の上陸だ。平素の訓練を発揮し、御国に御奉公すべきときが来た。ひめゆり学徒の本領を発揮し、皇国のために働いてもらいたい」

と感慨にみちた面持ちで、わざわざ縁先からおりて一人一人にあいさつされた。乙女らの胸は、桜の校章で飾られてはりつめていた。

アルバムからはぎとった親兄弟、親しいお友達の写真を胸に抱きしめながら、部長住宅の西門から南風原陸軍病院へと出発したのは十時ごろだった。塀のそばの芙蓉の木もみんなの門出を祝しているかのように見えた。付属校の前から練兵橋を通って識名の坂にかかった。「十十空襲」ですでに焦土と化した那覇市の残骸が淡い月影に照らされていた。ひめゆり学園の赤いイラカも月に照ら

され、農場（現在、真和志中学）の木麻黄（松に似た亜熱帯植物）がしょんぼり立っていた。これで千幾百名の生徒はことごとくひめゆり学園を去ってしまったのである。

戦いに勝って、ふたたびこの学園にどうのはいつの日のことか。人々の心の動揺にひきかえなるといふ静かな晩であつたろう。あの那覇市の残骸の中では、背負えるだけのものを背負い、幼児の手をひいて避難しようとなわてふためいている無数の人々のあることを思うと、「十空襲」のことが悪夢のように浮かんできた。

十月十日の朝、ヨウジをくわえて井戸ばたに立っていると、高射砲の煙が西空の朝もやの中にボンボンあがった。朝っぱらから演習かなと思っていると、けたたましくサイレンが鳴りひびく。

空襲だ！ 子どもの手をひっぱって家庭防空壕に飛びこむや、たちまちズシンズシンと地ひびきが伝わる。正子、民子がおびえて私の顔を見つめていた。今の爆弾は一キロと離れてはいない。

「学校へ出かけるぞ」

といったが妻の返事はなかった。妻子を壕に残して思いきって門を出た。飛行機がひっきりなしに飛んで、道は歩けない。また壕へもどったが、ふたたび意を決して二中前大通りに出た。家を出てまでもなく城岳（ひら）一帯も盛んに爆撃を受け、みるみる猛火につつまれた。やっと学校にたどり着いて、野田校長と雲雀ヶ丘（松川小学校の西の丘）の古墓に待避した。墓の入口から二中前を眺めていると、投下される爆弾が二つ、三つ、四つと数えられる。爆破のたびに、ズシンズシンと遠く地ひびきが伝わる。妻子は無事に避難できたろうか。二中の校舎にも火がつき猛火はたちまち天をこがした。

那覇港付近に黒煙がもうもうとあがり、万雷のような轟音がとどろく。ドラムカン集積所に引火したらしい。四方八方に火を発し、やがて那覇全体は火の海と化した。

善興堂病院の入院患者十数名が圧死、県病院の患者多数が焼死、連隊区司令官井口大佐が殉職、中村眼科医が焼死と、つぎつぎ悲報が伝わった。夕方になってしばらく空襲がやんだので、学校を出て牧志町に進み、まだ燃えつづけている電柱の下をくぐり、焼けこげた牛の臭いをかぎながら、炎の中を跳びこえ跳びこえ壺屋入口に出た。陶器組合事務所は五百キロの直撃弾をくらい木っ葉微塵に粉碎され、大きな弾痕が口をあいている。木片の散乱した丘の岩かげに兵隊が死んでいた。丘の側の防空壕入口には黒い防空頭巾をかぶった婦女子がうろろしていた。その先には歩哨が立ち那覇市内には一歩も立ち入らさぬと、警戒を厳にしていた。しかたなくこっそり、横道にぬけ警戒網を突破して第二中学校うらの大和人墓地にまわる。松林の墓場にはいると、燃えさかる第二中学校の黒煙がうずまいていいる。墓石の中を煙をはらいながら進む。電気会社の焼けこげた壁が、三角定規のように炎と煙の中につつ立ち、県病院、松山国民学校、第二高等女学校、大典寺と久茂地町から松山一帯が紅蓮につつまれている。人氣のない丘に一人立って燃えさかる全市の業火を眺めていると、地獄にでもさまよっているような気がした。かつて浮島であった時代から、あるいは溝をさらえ、埋め立てをし、石垣を積み粒々辛苦、やがて美しいカワラぶきの屋根が並び建ち鉄筋の高層建築まで建った近代都市の大那覇市が、いま灰燼に帰しつつある。東亜のあけぼの、あの港を船出して、季節風に帆をはらませて、遠く南海に航して御物城に宝を積んだ、その歴史もいま焦土に化しつつある。

朱の瓦屋根のかげろふ春の日にもみなよろしわが住める那覇

と歌われた那覇が、業火に燃えているのである。

私は二中の堀にそう細路をやつと見つけた。思いきつて火の中を跳びこえ二中前大通りへ出た。けている。道はとうとうふさがつてしまった。白煙をすかして見ると、焼けこげた石垣の向こうに家が二、三軒残っている。たしかにわが家だ。すぐに石垣を跳びこえて防空壕をのぞいたが、フトン、モンベ、ムシロ、食器類が散乱しているだけで妻子はいなかった。鶏舎に一羽のニワトリがコッコッと鳴いていた。縁先の桑の木が燃えている。危機一髪だった。消しとめて亡き母の墓前にぬかずくように玄関に手をあわせた。妻子はいいたいどこへ避難したろうか。儀間のおばさんのところをたずねると古墓の中から、

「ここには来ていませんよ、どうしたんでしょう」

という。いっそう不安をつのらせる。従兄の仲里刑務所長の官舎にもいなかった。牧志のおぼのところだろうかどこだろうかと一晚中さがし歩いたが、とうとうゆくえがわからなかった。それから二、三日たって、真和志村仲栄間をさがし、遠く東風平までさがしたが、そのかいもなかった。やっと五日めに、二歳になる紀子を背負い、七歳の正子を歩かせ、四歳の民子の手をひいて、郷里国頭へのがれたことがわかった。

ふとわれに返ると、与那嶺松助、内田文彦教官と仲宗根訓導（玉木芳雄）がいっしょに歩いている。空襲の翌日、女子挺身隊を引率して崇元寺の裏で死体の片づけをしたのは与那嶺教官であった。